

女子学生のASD傾向とソーシャルサポートが レジリエンスに与える影響

Impact of ASD Traits and the Social Support on Resilience among Female University Students

岩佐 実旺

跡見学園女子大学大学院
人文科学研究科臨床心理学専攻

Mio Iwasa

Graduate School of Humanities Division of
Clinical Psychology Atomi University

酒井 佳永

跡見学園女子大学
心理学部臨床心理学科

Yoshie Sakai

Faculty of Psychology Atomi University

要 約

ASD傾向を構成する5つの特性が、どのようなソーシャルサポートに影響を及ぼすかを検討するとともに、これを介してレジリエンスの高さにどのような影響を及ぼすかについて検討することを目的に、150人の女子大学生を対象とした質問紙調査を実施した。

使用した尺度は、自閉症スペクトラム指数日本語版、大学生用ソーシャルサポート尺度、精神的回復力尺度であった。これらの尺度間の相関分析および重回帰分析の結果から、ASD傾向が家族と友人のソーシャルサポートに及ぼす影響を検討するとともに、ASD傾向がソーシャルサポートを媒介としてレジリエンスに影響を及ぼすモデルを探索的に作成した。最終的なモデルは十分な適合度を有しており、以下のような関連が示唆された。

ASD特性のうち「社会的スキル」は友人の評価的サポートを介して肯定的な未来志向に、友人の情緒・所属的サポートを介してレジリエンスに負の影響を与えていた。「想像力」は友人の情緒・所属的サポートを介して感情調整に負の影響を与えていた。その一方で、「注意の切り替え」は家族の評価的サポートを介して感情調整に負の影響を与えていた。

またソーシャルサポートを介さず、直接的にレジリエンスに影響を与えるASD特性も認められた。「社会的スキル」は新奇性追求と感情調整に、「注意の切り替え」は新奇性追求と感情調整と肯定的な未来志向に、それぞれ負の影響を与えていた。一方で「細部への注意」は肯定的な未来志向に正の影響を与えていた。

これらの結果から、ASD傾向を有する大学生において、周囲からのソーシャルサポートが得られやすくなるように、それぞれが有するASD特性に合わせた支援を行うことにより、レジリエンスを高める一助となる可能性が示唆された。特に、「社会的スキル」に関わる障害に配慮した支援を行うことは、有用だと考えられた。

【Key Word】 自閉スペクトラム症 ASD傾向 ソーシャルサポート レジリエンス

I. 問題と目的

自閉スペクトラム症 (Autism Spectrum Disorder : 以下ASD) は、社会的コミュニケーションおよび相互関係における持続的障害と、限定された反復する様式の行動・興味・活動を特徴とする。また、自閉症スペクトラムは広義の自閉症の概念であり、自閉症の症状を健常者と自閉性障害者との間に量的なスペクトラム (連続体) を仮定するものである (Wing, 1981)。

成人期のASDとして診断されている者 (以下ASD者) の75%は少なくとも一つの精神的問題を抱えていることがわかっている (Ghaziuddin & Zafar, 2008)。また、酒井 (2012) は診断には至らないASD傾向を有する人も、精神的健康状態が悪くなりやすいことを報告している。高林 (2012) は一般大学生を対象に行った質問紙調査の結果から、ASD傾向の高さは精神健康度の低さに影響を及ぼす影響があることを示唆している。これらは、ASD閾下ケースにも臨床ニーズがあることを示唆している。よって、臨床群ではないASD傾向を有する大学生を対象とした研究には意義があるといえる。

精神的健康との関連が深い概念としてレジリエンスがある。レジリエンスとは、困難で脅威的な状況においてうまく適応する過程・能力・結果のこと (Masten et al., 1990) である。ASDをはじめとした発達障害を有していると「困難で脅威的な状況」にさらされやすく、失敗体験や不全感を積み重ねやすいと言われている (Szatmari, 2018)。しかしASD者においても、比較的精神的健康に過ごすことができる者もいることから、ASDを有する人において

もレジリエンスは重要な役割を持つと考えられている (小保方, 2010)。また、ASD傾向とレジリエンスとの関連についての研究では、ASD傾向が高い者ほどレジリエンスが低いという報告がされている (田中, 2013)

土田 (2014) はASD傾向とレジリエンスの関連を媒介する要因としてソーシャルサポートに着目し、ASD傾向とレジリエンスとの関連は、ソーシャルサポートの乏しさによって媒介されると報告している。この報告を考慮すると、ASD傾向を有する者において、ソーシャルサポートをより多く得られるように支援することは、レジリエンスを高めるうえで有用と考えられる。

ASD傾向とソーシャルサポートとの関連を検討した先行研究では、ASD傾向が高い者はソーシャルサポートが得られにくいことが一貫して報告されている。例えば、ASD傾向が高い大学生は、ASD傾向が低い大学生よりも得られるソーシャルサポートが乏しいという報告がある (金井, 2010)。また、ASD傾向が高いとソーシャルサポートが得られるという期待が低いこと、またはASD傾向が高い者においては他者から実際に得るサポート量が少ない可能性や、他者がサポートしてくれていても、それをサポートであると知覚できない可能性も指摘されている (金井, 2010)。さらにASDの特性を有する者は、他者の非言語行動を解釈するのが難しいといった特徴があるため (Ehlers & Gillberg, 1993)、ソーシャルサポートを効果的に得られない可能性があると考えられる (金井, 2010)。しかしどのようなASD特性が、どのようなサポート源からの、どのような種類のサポートに影響

を及ぼすかについては検討されていない。

青木（2015）は、成人期の発達障害者への支援の在り方についてASD診断の有無だけでなく、その個人の持つASD傾向の細やかな見立てが必要と報告している。ASD傾向、ソーシャルサポート、レジリエンスの関連を検討する際にも、どのようなASD特性が、誰からの、そしてどのような種類のサポートと関連しているのか、またASD傾向を有する人においては、どのようなサポートが、レジリエンスのどのような側面を高めるのかについて検討することは、ASD傾向を有する大学生への支援を考えるうえで有用だと思われる。

そこで本研究では、①ASD傾向を構成する5つの特性が、どのようなソーシャルサポートと関連するかを検討すること、②どのようなソーシャルサポートがレジリエンスの高さと関連するかを検討すること、③ASD傾向がソーシャルサポートを媒介として、レジリエンスに影響を及ぼすモデルを検討することの3点を目的とした。

II. 方法

1. 調査対象者

関東圏の大学に在籍する女子大学生および女子大学院生151名を対象とした。

2. 調査時期

2020年7月から11月にかけてウェブ調査を実施した。

3. 調査方法

オンライン調査ツールであるGoogleフォームを使用して質問票を作成した。調査依頼に際しては、調査についての説明文および調査用のURLを送信した。

4. 質問紙の内容

(1) フェイスシート

学年、年齢について尋ねた。

(2) 自閉症スペクトラム指数 (Autism Spectrum Quotient : AQ) 日本語版 (若林, 2004)

この尺度は、「社会的スキル」、「注意の切り替え」、「細部への注意」、「コミュニケーション」、「想像力」の5因子、50項目で構成されている。回答法は4件法で求めた。

(3) 大学生用ソーシャルサポート尺度 (片受, 2014)

ソーシャルサポートを測定する尺度である。「評価的サポート」、「情報・道具的サポート」、「情緒・所属的サポート」の3因子23項目で構成されている。家族と友人という二つのサポート源について知覚されたサポートについてそれぞれ測定する。回答は4件法で求めた。

(4) 精神的回復力尺度 (小塩, 2002)

レジリエンスの状態にある者の心理的特性を測定する尺度である「新奇性追求」、「感情調整」、「肯定的な未来志向」の3因子21項目で構成されている。回答は5件法で求めた。

5. 倫理的配慮

本研究は、跡見学園女子大学の研究倫理審査委員会での承認を得た（受付番号20-007）。

III. 結果

1. ASD特性およびソーシャルサポートがレジリエンスに与える影響

AQおよび大学生用ソーシャルサポート尺度が精神的回復力尺度に与える影響を検討するため、強制投入法による重回帰分析を行った。

(1) ASD特性が家族のソーシャルサポートに与える影響

AQの下位尺度を説明変数、家族の大学生用ソーシャルサポート尺度の下位尺度を目的変数とした重回帰分析を行った。結果をTable 1に示す。

評価的サポートを目的変数とした分析では、Adjusted R^2 は.046 ($p < .05$)であり、AQの5つの下位尺度で家族の評価的サポートの約5%を説明していた。標準化回帰係数をみると、家族の評価的サポートに対して細部への注意が正の影響を及ぼしていた ($\beta = .175, p < .05$)。

情報・道具的サポートを目的変数とした分析では、Adjusted R^2 は.060 ($p < .05$)であり、AQの5つの下位尺度が家族の情報・道具的サポートの約6%を説明していた。標準回帰係数をみると、家族の情報・道具的サポートに対して想像力が有意な負の影響を及ぼしていた ($\beta = -.204, p < .05$)。

情緒・所属的サポートを目的変数とした分析では、Adjusted R^2 は.095 ($p < .01$)で

あり、AQの下位尺度で家族の情緒・所属的サポートの約10%を説明していた。標準回帰係数をみると、家族の情緒・所属的サポートに対して社会的スキル ($\beta = -.240, p < .05$)、想像力 ($\beta = -.17, p < .05$)が有意な負の影響を及ぼしていた。

(2) ASD特性が友人のソーシャルサポートに与える影響

AQの下位尺度を説明変数、友人の大学生用ソーシャルサポート尺度の下位尺度を目的変数とした重回帰分析を行った。結果をTable 2に示す。

評価的サポートを目的変数とした分析では、Adjusted R^2 は.133 ($p < .001$)であり、AQの下位尺度で友人の評価的サポートの約10%を説明していた。標準回帰係数をみると、友人の評価的サポートに対して社会的スキルが有意な負の影響を及ぼしていた ($\beta = -.388, p < .001$)。

情報・道具的サポートを目的変数とした分析では、Adjusted R^2 は.093 ($p < .001$)であり、AQの下位尺度で友人の情報・道

Table 1 AQと家族の大学生用ソーシャルサポート尺度の重回帰分析

説明変数	評価的	情報・道具的	情緒・所属的
	β	β	β
社会的スキル	-0.095	-0.125	-0.240 *
注意の切り替え	0.027	0.170	0.183
細部への注意	0.175 *	0.098	0.128
コミュニケーション	-0.060	-0.030	-0.016
想像力	-0.123	-0.204 *	-0.170 *
R	0.280	0.303	0.354
R^2	0.078	0.092	0.125
Adj R^2	0.046 *	0.060 *	0.095 **

* $p < .05$, ** $p < .01$

Table 2 AQと友人の大学生用ソーシャルサポート尺度の重回帰分析

説明変数	評価的	情報・道具的	情緒・所属的
	β	β	β
社会的スキル	-0.388 ***	-0.420 ***	-0.385 ***
注意の切り替え	0.026	0.040	0.060
細部への注意	-0.018	-0.063	0.008
コミュニケーション	0.004	0.159	0.030
想像力	-0.095	-0.076	-0.247 **
R	0.402	0.351	0.459
R^2	0.162	0.123	0.211
$Adj R^2$	0.133 ***	0.093 ***	0.183 ***

** $p < .01$, *** $p < .001$

具的ポートの約9%を説明していた。標準回帰係数をみると、友人の情報・道具的サポートに対して社会的スキルが有意な負の影響を及ぼしていた($\beta = -.42$, $p < .001$)。

情緒・所属的サポートを目的変数とした分析では、Adjusted R^2 は.183 ($p < .001$)であり、AQの下位尺度で友人の情報・道具的ポートの約18%を説明していた。標準回帰係数をみると、友人の情緒・所属的サポートに対して社会的スキル ($\beta = -.385$, $p < .001$)、想像力 ($\beta = -.247$, $p < .01$)が有意な負の影響を及ぼしていた。

2. ASD特性と家族・友人のソーシャルサポートがレジリエンスに与える影響

ASD特性と家族・友人からのソーシャルサポートがレジリエンスをどの程度予測できるかを検討するため、階層的重回帰分析を行った。目的変数は精神的回復力尺度の下位尺度(新奇性追求、感情調整、肯定的な未来志向)とした。説明変数として第1ステップでAQの下位尺度を投入した。第2ステップでは家族・友人の大学生用ソ-

シャルサポート尺度の下位尺度を投入して分析を行った。結果をTable 3に示す。

新奇性追求を目的変数とした結果、第1ステップで投入したAQ下位尺度は、新奇性追求の全分散の約22%を説明しており(Adjusted $R^2 = .219$, $p < .001$)、注意の切り替えは新奇性追求に有意な負の影響をおよぼしていた ($\beta = -.345$, $p < .001$)。一方、第2ステップで投入した家族・友人の大学生用ソーシャルサポート尺度による R^2 の増分は有意ではなかった ($p < .735$)。

感情調整を目的変数とした結果、第1ステップで投入したAQ下位尺度は感情調整の全分散の14%程度を説明し(Adjusted $R^2 = .135$, $p < .001$)、注意への切り替えが感情調整に負の影響を及ぼしていた ($\beta = -.307$, $p < .001$)。第2ステップで投入した家族・友人のソーシャルサポートはAQ下位尺度とは独立に感情調整の全分散の約8.4%を説明しており、家族の評価的サポート ($\beta = -.326$, $p < .01$)が感情調整に正の影響を示した。

肯定的な未来志向を目的変数とした結

Table 3 精神的回復力尺度を目的変数とした階層的重回帰分析

説明変数	新奇性追求		感情調整		肯定的な未来志向	
	Step1	Step2	Step1	Step2	Step1	Step2
	β	β	β	β	β	β
Step1 AQ						
社会的スキル	-0.161	-0.162	-0.121	-0.065	-0.346 ***	-0.280 **
注意の切り替え	-0.345 ***	-0.341 ***	-0.307 ***	-0.292 **	-0.191 *	-0.213 *
細部への注意	0.101	0.088	0.071	0.028	0.199 *	0.173 *
コミュニケーション	-0.040	-0.027	-0.041	-0.018	0.066	0.085
想像力	-0.098	-0.115	-0.020	0.024	-0.052	-0.025
Step2 大学生用ソーシャルサポート尺度						
家族の評価的サポート		0.048		0.326 **		0.100
家族の情報・道具的サポート		-0.143		-0.149		0.111
家族の情緒・所属的サポート		0.129		-0.036		0.012
友人の評価的サポート		0.107		0.069		0.282 *
友人の情報・道具的サポート		-0.066		-0.088		-0.046
友人の情緒・所属的サポート		-0.086		0.163		-0.131
R	0.495	0.514	0.405	0.498	0.467	0.547
R^2	0.245	0.264	0.164	0.248	0.218	0.299
$Adj R^2$	0.219 ***	0.206 ***	0.135 ***	0.188 ***	0.190 ***	0.243 ***
ΔR^2	0.245 ***	0.019 <i>n.p.</i>	0.164 ***	0.084 *	0.218 ***	0.081 *

* $p < .05$, ** $p < .01$, *** $p < .001$

果、第1ステップで投入したAQ下位尺度は肯定的な未来志向の全分散の19%程度を説明し (Adjusted $R^2 = .190$, $p < .001$)、社会的スキル ($\beta = -.346$, $p < .001$) と注意の切り替え ($\beta = -.191$, $p < .05$) が感情調整に対して負の影響、細部への注意 ($\beta = .199$, $p < .05$) が正の影響を示した。また第2ステップで投入した家族・友人のソーシャルサポートはAQ下位尺度とは独立に全分散の約8%を説明しており、友人の評価的サポート ($\beta = .282$, $p < .05$) が肯定的な未来志向に有意な正の影響を及ぼしていた。

3. ASD傾向がソーシャルサポートを介してレジリエンスに影響を及ぼすモデルの検討 (共分散構造分析)

(1) モデルの作成

ASD傾向がソーシャルサポートを媒介として、レジリエンスに影響を及ぼすモデルを検討するため、共分散構造分析 (最尤推定法) を行った。先行研究および重回帰分析・階層的重回帰分析の結果を元に、探索的にモデル作成した。Figure 1 が予想されたパス図である。同一尺度の下位尺度間に有意な相関がある場合は、共分散もしくは誤差間共分散を仮定したが、モデル図が煩雑になるためFigure 1 では省略して示した。

(2) 仮説モデルに関する共分散構造分析

Figure 1 に示した仮説モデルについて、共分散構造分析を行い、データとの適合を検討した。その結果、有意ではなくなったパスを削除し、またAmosの修正指数を参

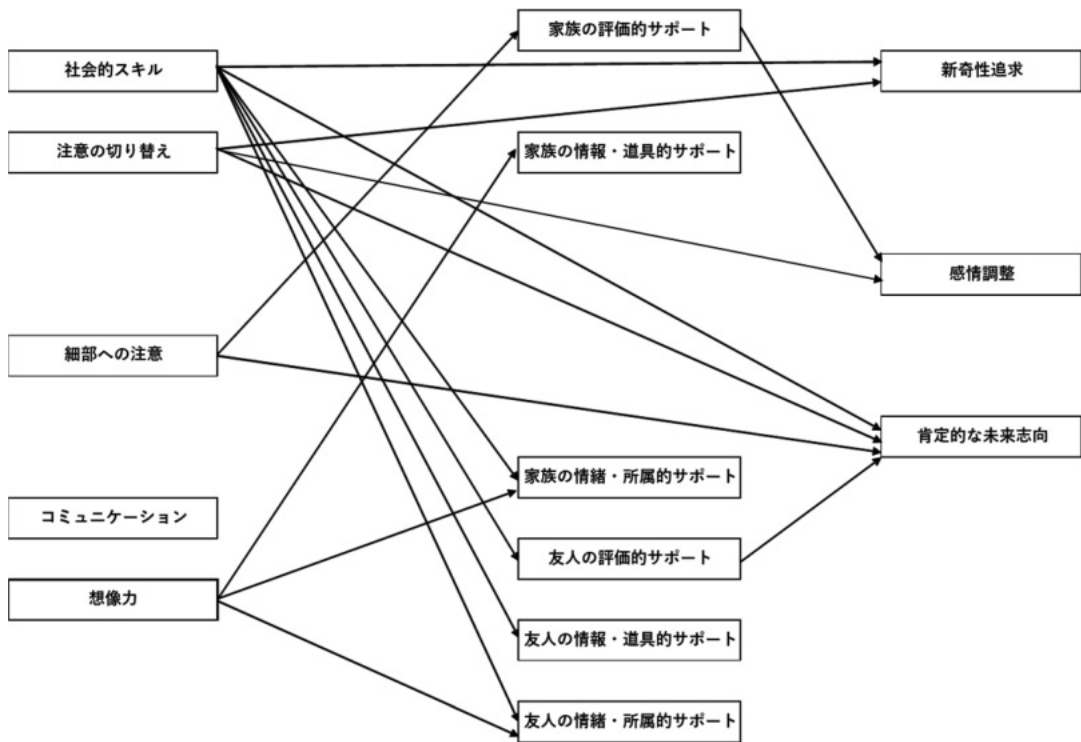


Figure 1 重回帰分析をもとに作成したモデル図

照してパスを加え、採択可能なモデルを決定した。最終的なモデルの適合度は $\chi^2(54) = 53.539 (p = .492)$ 、 $GFI = .954$ 、 $AGFI = .910$ 、 $CFI = 1.000$ 、 $RMSEA = 0.000$ となり十分な値を示した。最終的なモデルをFigure 2に示す。

最終的なモデル (Figure 2) において、AQの社会的スキル下位尺度得点は、友人の評価的サポートに負の影響を与え、これを介して肯定的な未来志向に対して負の影響を与えていた。また社会的スキル下位尺度は、友人の情緒・所属的サポートに負の影響を与えており、これを介して感情調整に負の影響を与えていた。すなわち社会的スキルに関わるASD特性は、友人の評価的サポート、友人の情緒・所属的サポートを得られにくくしており、その結果として、

レジリエンスのうち肯定的な未来志向や感情調整が低くなっていることが示唆された。さらに社会的スキル得点から肯定的な未来志向 ($\beta = -.223$)、新奇性追求 ($\beta = -.198$) への直接的なパスが有意であり、社会的スキルに関わるASD特性はソーシャルサポートの得られにくさとは独立に、肯定的な未来志向と新奇性追求に負の影響をおよぼしていると考えられた。

AQの注意の切り替え尺度得点は、家族の評価的サポートに負の影響を与えており、これを介して感情調整と肯定的な未来志向に対して負の影響を与えていた。すなわち注意の切り替えに関わるASD特性は家族からの評価的サポートを得られにくくしており、その結果として、レジリエンスが低くなっていることが示唆された。また、

注意の切り替え下位尺度は、新奇性追求 ($\beta = -.346$)、感情調整 ($\beta = -.317$)、肯定的な未来志向 ($\beta = -.180$) に直接的な負の影響を与えていた。すなわち注意の切り替えに関わるASD特性は、ソーシャルサポートの得られにくさとは独立にレジリエンスに負の影響を与えていることが示唆された。

AQの細部への注意尺度得点は、家族・友人のソーシャルサポートに有意な影響を示さなかったが、肯定的な未来志向 ($\beta = .134$) に直接的な正の影響を示した。すなわち細部への注意に関わるASD特性は他のASD特性とは異なり、レジリエンスに正の影響を与えていることが示唆された。

AQの想像力尺度得点は、友人の情緒・

所属のサポートに負の影響を与えており、これを介して感情調整に対して負の影響を与えていた。すなわち想像力に関わるASD特性は、友人からの情緒・所属のソーシャルサポートを得られにくくしており、これを介してレジリエンスを低くしていることが示唆された。

ソーシャルサポートとレジリエンスとの関連については、家族からの評価的サポートと友人からの情緒・所属的サポートが感情調整に正の影響を与え、家族と友人からの評価的サポートは肯定的な未来志向に正の影響を与えていた。

その一方で、ごく弱い関連ではあるが、家族からの情報・道具的サポートが感情調整に負の影響を与えていた ($\beta = -.199$)。

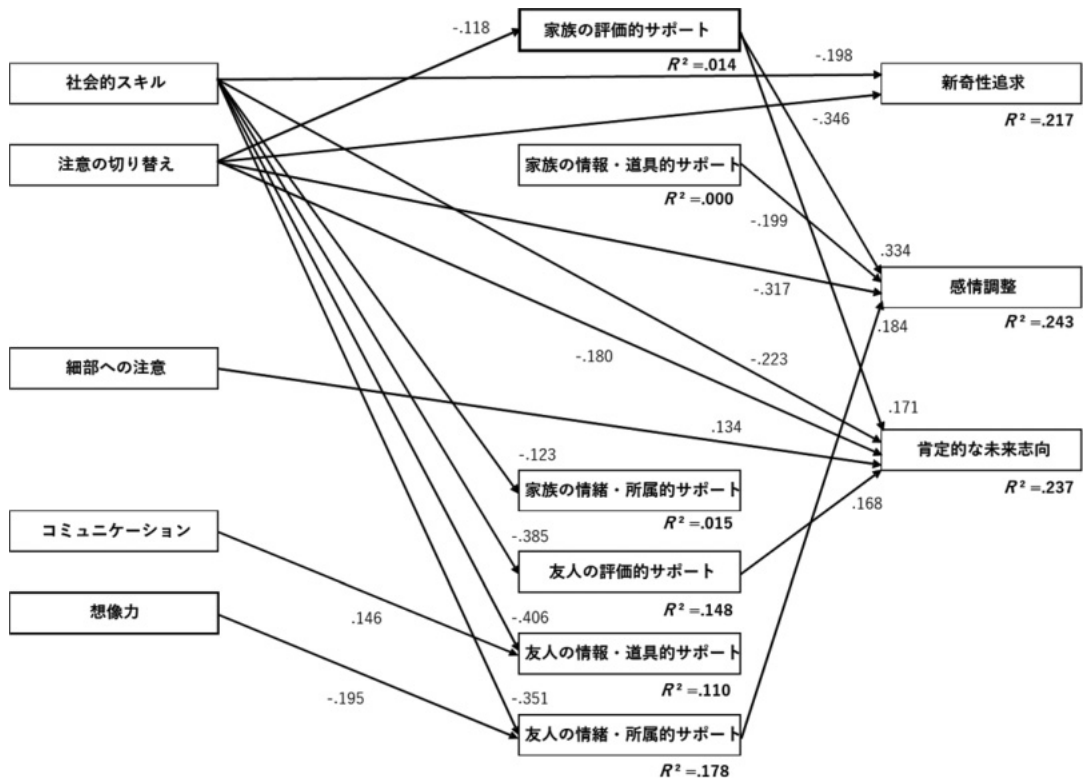


Figure 2 ASD特性がソーシャルサポートを介してレジリエンスに寄与するモデルの共分散構造分析
 $\chi^2(54) = 53.539$, $p = .492$, $GFI = .954$, $AGFI = .910$, $CFI = 1.000$, $RMSEA = 0.000$

IV. 考察

共分散構造分析の結果、ASD傾向は、ソーシャルサポートの得られにくさを介してレジリエンスに負の影響を与えるという仮説が、部分的に指示された。一方、一部のASD特性は、ソーシャルサポートを介さずにレジリエンスに直接影響を与えること、ソーシャルサポートやレジリエンスにポジティブな影響を与える特性もあることが示唆された。

1. ASD傾向が家族および友人からのソーシャルサポートに及ぼす影響について

AQの5つの特性のうち「社会的スキル」は、全ての友人からのサポートに負の影響を及ぼしており、社会的スキルに関わるASD特性は、友人からのサポートを得られにくくしていることが示唆された。渡辺(1994)は大学生を対象に社会的スキルとソーシャルサポートの関連について検討したところ、社会的スキルが高い群は低い群よりソーシャルサポートが得られていることを報告している。本研究の結果から、ASD特性としての社会的スキルの低さは、ASD傾向に関わらない一般的な社会的スキルと同様にソーシャルサポートの得られにくさに影響を与えていることが示唆された。

次に、「注意の切り替え」は家族の評価的サポートに有意な負の影響を及ぼしており、注意の切り替えに関わるASD特性は家族からの評価的サポートを得られにくくしていることが示唆された。

次に、「コミュニケーション」は、友人のソーシャルサポートの内、情報・道具的サポートに対して有意な正の関連を示して

いた。相関分析による単変量解析では「コミュニケーション」は、友人の評価的サポート、および情緒・所属的ソーシャルサポートとの間に有意な負の関連があり、情報・道具的サポートとの間には有意な関連が見られなかったことを考慮すると、ASD特性としてのコミュニケーションが、友人からの情報・道具的サポートに良い影響をもたらすという単純な関連とは考えにくい。この結果は、他のASD特性も高い場合に、自分自身のASD的なコミュニケーション特性を自覚していることが、情報・道具的サポートを得るうえでポジティブな側面に働くことがある可能性を示唆しているのかもしれない。この点については、再現性も含めて、今後のさらなる研究が必要であろう。

最後に、「想像力」は、友人の情緒・所属的サポートに負の影響を及ぼしていた。また共分散構造分析では有意なパスが認められなかったが、重回帰分析の結果では、家族の情報・道具的サポート、家族の情緒・所属的サポートにも負の影響を及ぼしていた。これらの結果から、想像力に関するASD特性は、特に情緒・所属的サポートの得られにくさと関連していることが示唆された。先行研究では、ASDの特性により、他者の非言語行動を解釈するのが難しいために、ソーシャルサポートを効果的に得られない可能性が示唆されている(金井, 2010)。本研究の結果もこれと一致した結果であると考えられ、ASD特性として想像力の乏しさがあると、情緒・所属的サポートという具体的な形では示されないソーシャルサポートを認知しにくい可能性がある。

ここまで述べたAQ下位尺度で評価されるASD特性は、すべてソーシャルサポートを得られにくくする影響を及ぼしていた。しかし、AQの下位尺度である「細部への注意」については、共分散構造分析においては、家族・友人のソーシャルサポートのいずれとも有意な関連を示さなかったが、重回帰分析では家族の評価的サポートに有意な正の影響を与えていた。つまり細部に注目する傾向の高いほど、家族からの評価的サポートを多く認知していた。細部への注意に関わるASD特性は、家族にはポジティブに評価されやすい可能性がある。

これらの結果から、ASDの特性はサポートの源（家族か、友人か）、サポートの種類により、異なる影響を及ぼすことが示唆された。またASD特性のなかでも、サポートの得られにくさと特に関連が強いのが社会的スキルであることが示唆された。これを考慮すると、ASD傾向を有する人に対して、Social Skills Trainingのように社会的なスキルを高めるような介入を行うこと、もしくは友人からのサポートを得るにあたり、どのように行動したらよいかといった具体的な指針を示すことは、家族以外からの必要なソーシャルサポートを得やすくすることに有意義であると考えられる。

2. 家族および友人からのソーシャルサポートがレジリエンスに及ぼす影響について

本研究では、サポート源やサポートの種類により、どのようなレジリエンスに影響を及ぼすのかについて検討した。

家族の評価的サポートは感情調整、肯定的な未来志向に正の影響を与えていた。友

人の評価的サポートは肯定的な未来志向の正の影響を与えていた。すなわち、評価的なソーシャルサポートは、レジリエンスの、特に肯定的な未来志向にポジティブな影響を与えることが示唆された。家族や友人から、良い側面について認めてもらえることは、自分自身の未来について肯定的に予測するうえで重要な意味を持つことが示唆される。これらの結果から、実際の支援において、本人が周囲から肯定的な評価を得られやすくするように支援を行うこと、さらに家族を始めとする重要な他者との関係を調整することや、家族や重要な他者に対する本人との関わり方に関するコンサルテーションを行い、本人の良い側面に注目してもらうことなども、本人のレジリエンスを高めるうえで重要なのではないかと考えられる。

共分散構造分析の結果、家族の情報・道具的サポートは感情調整に負の影響を与えていた。この予想外の結果については、因果関係の解釈は逆になるが、感情調整にかかわるレジリエンスが低い場合に、家族からの情報・道具的サポートがより多く必要になる、という関連がある可能性は否定できない。もしくは、Bolger (2007) による研究も、この予想外の関連を解釈する上で役立つかもしれない。Bolger (2007) はソーシャルサポートが最も効果的であるのは①受け手の意識外で行われるか、②受け手の意識内で行われるが、受け手がそれを支援とは解釈しない程度の繊細さで行われる場合であるという仮説を検証するために、女性を対象とした実験を行った。その結果、サポートを受けていると認識すると、自分は能力のない人間だと考えてしま

うため、サポートが効果的に効果しないと述べている。家族の情報・道具的サポートとレジリエンスのネガティブな関連については、こうした側面も影響しているかもしれない。

一方で、友人の情報・道具的サポートは共分散構造分析においては、新奇性追求、感情調整、肯定的な未来志向のいずれとも有意な関連を示さなかったが、相関分析による単変量解析では精神的回復力 ($r = .320, p < .01$)、肯定的な未来志向 ($r = .327, p < .01$) との間に有意な正の関連がみられた。すなわち家族の情報・道具的サポートはレジリエンスを低くすることがあるのに対し、友人の情報・道具的サポートはレジリエンスを高めることが示唆された。このことから情報・道具的サポートはサポート源によってレジリエンスに与える影響が異なることが示唆された。

共分散構造分析において、家族の情緒・所属的サポートはレジリエンスと有意な関連を示さなかったが、友人の情緒・所属的サポートは感情調整に正の影響を与えていた。このことから友人の情緒・所属的サポートはレジリエンスに正の影響を与えていることが示唆された。

これらの結果から、必ずしも全てのサポート源、サポートの種類がレジリエンスを高めるわけではないことが示唆された。具体的には、家族と友人からの評価的サポート、友人からの情緒・所属的サポートは、レジリエンスを高めることに寄与する可能性がある。一方で情報・道具的サポートはサポート源によってレジリエンスに与える影響が異なることが示唆された。

3. ASD傾向が家族および友人からのソーシャルサポートを介して、または独立にレジリエンスに及ぼす影響について
本研究では、重回帰分析の結果をもとに、探索的にASD傾向が家族および友人からのソーシャルサポートを介して、レジリエンスに影響を与えるモデルを作成し、その適合度を検討した。その結果、適合度の高いモデルを採択することができた。この結果から、ASD傾向は家族および友人からのソーシャルサポートを介して、もしくは直接的にレジリエンスに影響を及ぼすことが示唆された。

ただし、このモデルにおいては、レジリエンスの各側面の重相関係数は、いずれも20%をやや超える程度であり、高いとは言えないものであった。すなわち、女子学生のレジリエンスについては、ASD傾向、ソーシャルサポート以外の要因も多くかかわっており、女子学生のレジリエンスの予測モデルとしては必ずしも十分ではないことにも留意することが必要である。

以下に、AQで評価されるASD傾向の各側面が、どのようなソーシャルサポートを介して、レジリエンスに影響を与えるかについて、考察を行う。AQの5つの特性の内、「社会的スキル」は、友人の評価的サポートに負の影響を与え、これを介して肯定的な未来志向に対して負の影響を与えていた。また「社会的スキル」は、友人の情緒・所属的サポートに負の影響を与えており、これを介して感情調整に負の影響を与えていた。すなわち社会的スキルに関わるASD特性は、友人の評価的サポート、友人の情緒・所属的サポートを得られにくくしており、その結果として、レジリエンスの

うち肯定的な未来志向や感情調整が低くなっていることが示唆された。

次に、「注意の切り替え」は、家族の評価的支持に負の影響を与えており、これを介して感情調整と肯定的な未来志向に対して負の影響を与えていた。すなわち注意の切り替えに関わるASD特性は家族からの評価的支持を得られにくくしており、その結果として、レジリエンスが低くなっていることが示唆された。

次に、「想像力」は、友人の情緒・所属的支持に負の影響を与えており、これを介して感情調整に対して負の影響を与えていた。すなわち想像力に関わるASD特性は、友人からの情緒・所属的支持を得られにくくしており、これを介してレジリエンスを低くしていることが示唆された。

以上の結果から、社会的スキル、注意の切り替え、想像力に関わるASD特性の高さはソーシャルサポートを介してレジリエンスを低くしていることが示唆された。そのため、それぞれの特性に対し、社会的スキルに対しては友人の評価的支持、友人の情緒・所属的支持を、注意の切り替えに対しては家族の評価的支持を、想像力に対しては友人の情緒・所属的支持が得られる支援をしていくことが有益であると推察される。

さらに「社会的スキル」から肯定的な未来志向、新奇性追求への直接的なパスが有意であり、社会的スキルに関わるASD特性はソーシャルサポートの得られにくさとは独立にレジリエンスに負の影響をおよぼしていることが示唆された。また、「注意の切り替え」も、新奇性追求、感情調整、肯

定的な未来志向に直接的な負の影響を与えていた。すなわち注意の切り替えに関わるASD特性の高さは、ソーシャルサポートの得られにくさとは独立にレジリエンスに負の影響を与えていることが示唆された。ASD傾向が高い者ほどレジリエンスが低くなることがみられた結果は先行研究と一致した結果である（田中，2013）。

「細部への注意」は、家族・友人のソーシャルサポートに有意な影響を示さなかったが、肯定的な未来志向に直接的な正の影響を示した。すなわち細部への注意に関わるASD特性は他のASD特性とは異なり、レジリエンスに正の影響を与えていることが示唆された。この結果から、細部への注意に関わるASD特性の高さを本人がポジティブに捉えているとレジリエンスが高まる可能性があると考えられる。すなわち、ASD特性を有する者はASD特性の高さによってレジリエンスを低くすることを意味するのではなく、ASDの特性によってレジリエンスを低くすることもあれば高くすることもあることが示唆された。具体的には社会的スキル、注意の切り替えはレジリエンスを低くし、細部への注意はレジリエンスを高くすることが推測される。有するASD特性に合わせた支援を行っていくことでレジリエンスが高まると考えられる。

一方で、池田（2015）は一般大学生を対象にASD傾向と抑うつ（指標となっているBDI-IIを使用）の関連について検討したところ、細部への注意は抑うつに負の影響を与えることを示唆している。特にBDI-IIの下位尺度である「身体的・感情的要素」に影響することを示唆している。たとえば、不快な身体感覚への注意のとりわれ

によって、少しの体の不調に対しても過剰に反応してしまい、そこに注意の焦点が当てられることによって不安感や抑うつ感が高まり、さらにネガティブな感情や不快な身体感覚にとらわれることになると考えられる。

本研究の結果と池田（2015）の報告をふまえると、細部への注意は不快な身体感覚へのとらわれと関連して、精神的健康にネガティブな影響を与えるものの、細部に注意を向けること「ができる」というポジティブな特性としても捉えることができ、特に家族からは本研究と先行研究において、細部への注意が精神的健康および影響には異なる結果が得られていることが示唆された。このことから細部への注意は精神的健康にポジティブな影響を与えることもあればネガティブな影響を与えることもあることが示唆された。

V. おわりに

本研究の結果から、ASD傾向を有する者はASD者と同様にソーシャルサポートの得られにくさ、レジリエンスに負の影響を与えることが示唆された。このことから、たとえ未診断でもASD傾向を有する者にはASD者と同様に支援ニーズがあることが改めて確認された。また5つのASD特性がソーシャルサポートとレジリエンスに与える影響について詳細に検討したところ、特に社会的スキルに関わるASD傾向が、ソーシャルサポートの得られにくさを介してレジリエンスに影響を及ぼしていること、さらにレジリエンスに直接の影響を与えていることが示唆された。そのため、ASD特性の中でも特にソーシャルスキルに注目した

支援は、ASD傾向を有する者の生きやすさに役立つ可能性がある。

また、様々なソーシャルサポートの中でも家族と友人からの評価的サポートがレジリエンスに及ぼす影響が大きかったことから、本人が周囲の人に認められる体験をすることが重要ではないかということが示唆された。

また、特性やソーシャルサポートにより、レジリエンスにポジティブな影響を与えることもあればネガティブな影響を与えることもあることが示唆された。ASD傾向を有する者に対し、どのASD特性が本人の困り感を助長させているかをアセスメントし、特性に合わせた支援、ソーシャルサポートが得られる支援を行うことで、レジリエンスを高める一助となることが示唆された。

VI. 本研究の限界と今後の課題

最後に本研究の限界と今後の展望を述べる。本研究の対象者は女子学生のみであった。しかし、先行研究では、和田（1989）は、男性は女性よりも有意にソーシャルサポートを受けたいという結果が得られていること、若林（2004）は、ASD傾向は女性より男性の方が高くでる結果が得られていることなど、性差があることを示している。そのため今後は性差を考慮して検討を行っていくべきである。

また、本研究ではレジリエンスを「困難状況において苦痛を感じながらも、その後の適応的な回復を導く心理的な特性および能力」と定義したが、レジリエンスは様々な定義で研究が行われている。また、今回作成されたモデルは R^2 が低いことから、

レジリエンスは今回含めたモデルに含めなかった要因があると考えられる。そのため、レジリエンスについて更なる検討が必要である。

引用文献

青木省三・村上伸治 (2015). 大人の発達障害を診るとのこと

診断や対応に迷う症例から考える 医学書院.

池田慎哉 (2015). 大学生における自閉症スペクトラム傾向と抑うつ傾向の関連についての質問紙調査研究 自閉症スペクトラム研究13(1), 13-19.

金井嘉宏 (2010). 自閉症スペクトラム傾向を示す大学生の抑うつにソーシャル・サポートと被害念慮が及ぼす影響 カウンセリング研究43(2), 114-119.

片受靖・大貫尚子 (2014). 大学生用ソーシャルサポート尺度の作成と信頼性・妥当性の検討：評価的サポートを含む多因子構造の観点から 立正大学心理学研究年報(5), 37-46.

Masten, A. S., Best, K. & Garmezy, N (1990). Resilience and development: Contributions from the study of children who overcome adversity. *Development and Psychopathology*, 2, 425-444.

Bolger, N., Amarel, D(2007). Effects of social support visibility on adjustment to stress: experimental evidence *J Pers Soc Psychol* Mar ;92(3) : 458-75.

小保方晶子 (2010). 発達障害のある子どもの問題行動のリスク要因と防御要因. 日本心理学会大会論文集, 74号.

小塩真司・中谷素之・金子一史・長峰伸治 (2002). ネガティブな出来事からの立ち直りを導く心理的特性——精神的回復力尺度の作成. *日本カウンセリング研究*, 35号, 57-65.

酒井貴庸 (2012). 高等学校教師の自閉症スペクトラム障害理解度とASD傾向の生徒における精神的健康状態の関連. *日本教育心理学会総会発表論文集*, 54号, 438.

Szatmari, P (2018). Risk and resilience in autism spectrum disorder: a missed translational opportunity? *Dev Med Child Neurol*.

高林大輝・桂川泰典・菅野順 (2012). 自閉症スペクトラム傾向の高さが大学生生活に及ぼす影響. *日本教育心理学会総会発表論文集*54(0), 628.

田中純夫・西田敬志 (2013). 大学生における自閉症スペクトラムとレジリエンスとの関連 *日本教育心理学会総会発表論文集*, 55(0), 555.

土田弥生 (2014). 自閉症スペクトラム傾向と傷つきやすさ, レジリエンスの関連性の検討 *人間科学研究*, 27(1), 123-123.

若林明雄・東條吉邦・Simon Baron-Cohen・Sally Wheelwright (2004). 自閉症スペクトラム指数 (AQ) 日本語版の標準化—高機能臨床群と健常成人による検討—: 高機能臨床群と健常成人による検討 *心理学研究*. *心理学研究*, 75号, 78-84.

渡辺弥生 (1994). 大学生のソーシャルサポートと社会的スキルに関する研究 静岡大学教育学部研究報告人文・社会科

学篇(45), p241-254.

Wing, L(1981). Asperger's syndrome : a clinical account Psychol Med. Feb ; 11 (1) : 115-29.

謝辞

お忙しい中，調査にご協力くださった大学生，大学院生の皆様に厚く感謝を申し上げます。本研究にあたり，酒井佳永先生から丁寧なご指導と多大な助言を賜りました。厚く御礼を申し上げ，感謝いたします。